

理工系大学生の職業選択過程における自己効力感について

清水 浩*

横山 明子†

概要：理工系大学生の職業選択のための、キャリア関連の授業を通じて行う支援の在り方を考えるために、学生の職業への興味と、職業選択課題の遂行に対する「自己効力感」に着目し、職業選択行動との関連について検討した。その結果、自己効力感と、進路の決定の程度、及び職業興味などとの関連性、すなわち、職業選択を行うためには、自己理解を促進し自己効力感を高める必要があることが明らかになった。

このことから、特に授業においては、早期から「キャリアパスポート」を作成し、学修成果を可視化することや、それを活用して大学生生活の活動実績や自らの志向を端的に説明できる力を身に付けることの必要性が示唆された。

1. はじめに

昨今の新型コロナウイルスの影響を受け、就職に向けた企業説明会や面接、インターンシップ等をWEBやオンライン等で実施する企業が数多くみられる。中でも、新型コロナウイルスの影響が大きかった業界・業種においては、採用計画の見直しが続き、まだまだ今後の見通しが不透明な部分もあるため、業態を変え、この新たな時代の流れに柔軟に対応する企業もある。

今までの大学生が行ってきた就職活動の進め方を振り返ると、学生は、まずインターンシップや企業の説明会などに参加し、自ら直接多くの情報を収集し、この過程を通じて自分と仕事との接点を探しながら、希望する企業の絞り込みを行ってきた。

このような就職活動の結果として、本キャンパスの理工系学部（機械・精密システム工学科、航空宇宙工学科、情報電子工学科、バイオサイエンス学科）

*しみず ひろし 帝京大学宇都宮キャンパス リベラルアーツセンター

†よこやま あきこ 帝京大学宇都宮キャンパス リベラルアーツセンター

の学生の2020年度卒業生の進学・就職先の状況は、①製造業が30.6%、②学術研究、専門・技術サービス業が16.8%、③進学が10.0%、④サービス業が9.0%、⑤卸売業、小売業が6.7%である（キャリアサポートセンター，2021）。このように、各学科の専門知識やスキルを生かし、メーカーや情報通信産業などのエンジニアとして多くの卒業生が活躍し、さらに高度な研究の場を求めて大学院に進学する学生もいる。

さて今までは、直接多くの情報を企業から得ながら、就職活動を行ってきたが、現状では、コロナ禍のため企業に出向いてのインターンシップなど就業体験の機会がほとんどなくなり、さらに、情報メディアのデジタル化が急速に進んだことから、学生が得る情報はネット上の情報に限られている。そのため、学生は非常に限定的な情報によって職業選択を行わなければならない、自分自身と企業とのミスマッチが生じる可能性が大きくなっている。

これに加えて、理工系学生の場合には、職業選択を考える時期が比較的遅いことが指摘されている。これは、理工系の専門の授業では、自分自身を振り返る機会が少なく、自分の職業に対する興味・関心や将来に対する見通しが持ちにくいことから、職業選択に必要な課題への取り組み方がわからず自信のなさによるものと考えられる。

今後、学生が職業選択を行っていくには、ただ狭い範囲の情報に頼り、その時々々の社会状況に流されるのではなく、自分が置かれている状況に合わせて、自分の職業観を再考しながら自己理解を深め、就職活動の形も柔軟に変化させることが重要である。さらに、低年次の早い段階から、計画的に考えて行動することが必要である。

そこで、本研究では、今後、キャリア関連の授業を通じて行う支援を考えるために、理工系大学生の職業に対する興味・関心やそのために取り組む課題に対する「自己効力感」などの職業レディネスに注目し、その実態を明らかにする。なお、本研究における「自己効力感」とは、ある行動が自分にうまくできるかという予期を示す概念であり、進路選択過程において、適切な進路選択を行い、それに関連する課題を遂行できると思える「自信」のことである。これは、理工系大学生の将来に向けた職業選択行動との関連を検討するにあたっての1つの指標となる。

2. 本研究の目的

以上のように大学生が職業選択を行う際の課題を挙げてきたが、より具体的には、筆者が理工系大学生のキャリア科目の授業を担当する中で、学期当初の学生の状況は、職業適性についての自己理解の深化がみられず、将来就きたい職業を決められないといった職業未決定（横山・石川・糸川・森本，2015）の問題や、将来の仕事をうまく遂行できるかということへの不安が大きく、職業選択に必要な自分の行動に対しての自信のなさが課題として挙げられる。

例えば、インターンシップに向けた授業の中で、エントリーシートの作成を指導したが、かなり多くの学生が、学生生活で力を入れたこと、自己PR、インターンシップ志望動機などの項目内容の十分な記載ができなかった。それは、自分の大学生活で行っていることを振り返った際に、これまで自分自身のやってきたことや身に付いたことなどに自信が持てず、自分の考えや思いを文章化することが難しい学生が多いためだと考えられる。

また、これらの書面を作成する際に行った学生への聞き取りでは、サークルや部活動、アルバイト等いろいろな経験を積み重ねており、自分自身の進路についてしっかりと意識している学生は、記載内容が充実していた。一方、さまざまな経験を通して、自分にスキルや長所が身に付いていないと感じていた学生は、職業適性等を十分に理解するまでには至っていない状況であった。

この自己理解が不十分な学生は、自分の行動に対する自己効力感が低いことがうかがわれる。低い自己効力感を持つ学生は、進路選択行動に消極的であり、十分に必要な活動を行わない（浦上，1995；富永，2006）とされる。さらに、このことには、オンライン対応の授業科目の増加により、授業においても自分の学修の振り返りを他者と共有する機会が少ないために、就職や進路選択等に関する意識が高まらないことや、就職に関する準備不足などから、自己効力感が育たない（浦上，1993）ことも関係していると考えられる。

また、下村・室山・西村・菰田（2008）は、高校生を対象とし、後述する職業レディネステスト（VRT）を用いて、学年や男女による職業意識や職業レディネスの発達の違いを調査した。この研究では、職業に対して興味が高い分野に対してはその分野の職業選択を行う際に遂行する課題に対する自己効力感も高いことが示されている。

以上のことから、自己効力感の低い学生に対して、自分の適性に関する自己理解を図り、自信を持って課題を遂行できるようにすることが、ミスマッチを起こさずに職業選択できるようになるための大きな手掛かりとなると考える。

さらに、職業選択の準備の時期については、ベネッセ教育総合研究所（2014）が、卒業後の進路について何らかの検討を行っている大学生の大学卒業後の進路希望を報告している。この報告の中で、大学卒業後の進路に関する準備や活動の開始時期は、大学3年生の後期が31.1%、大学3年生の前期が20.0%、大学3年生の夏休みが14.0%など、大学3年生の時期から、大学卒業後の進路に向けた準備や活動を行った者が65.1%を占める結果となっている。

また、学部系統の差異をみると、大学2年生以前では、人文科学系が13.7%、社会科学系が14.7%、教育系が13.7%、理工系が10.0%、大学3年生前期では、人文科学系が22.1%、社会科学系が22.6%、教育系が31.3%、理工系が17.1%という結果であり、理工系は両方の調査結果のそれぞれで第4位となっている。特に大学3年生の後期では、人文科学系が32.0%、社会科学系が32.0%、理工系が34.3%、教育系が28.2%となり、理工系は第1位となっている。これらのことから、理工系学部の学生の卒業後の進路に向けた準備や活動が、他の系統の学部との比較では遅くなっていることが分かる。

さらに、将来展望の広がりや具体的な進路選択関連の学生の行動は、3年生がターニングポイントとなること、そのため大学生活のそれぞれの時期に応じた様々な支援のあり方が必要であるとする報告（五十嵐、2018）がある。

以上のことから、本研究では、できるだけ早期から授業における教育実践を改善するために、理工系大学生を対象とし、学生の将来に向けた職業選択や就職活動等の際の職業意識、職業興味・関心に関わる適性の理解の状況、及び職業選択の際に取り組むさまざまな課題に対する自己効力感などの職業レディネスについて、その実態を明らかにする。

具体的には、職業意識として、進路決定の度合い（以下、決定度と記載）、将来の仕事についての考慮の程度（以下、考慮度と記載）、職業選択の際の課題に対する自己効力感について、また、学生自身の適性理解として、後述する職業レディネス・テスト（VRT）で測定される職業興味の分野、基礎的志向性、職務遂行に対する自信の程度を明らかにし、これらの項目間の関連を考察する。

以上のことから、本研究の予想として、次の3項目を挙げる。①進路選択するための課題遂行に対して自己効力感が高い学生は進路の決定度や将来の仕事考慮度が高い。②職業レディネスに関しては、学部系統の特色によって異なる。③興味を持っている職業分野には、その分野の職務遂行ための課題に対する自信が関連している。

3. 方法

3.1 調査対象者

理工系学部のキャリア教育の科目であるキャリアデザイン1履修者(2年生)を対象とした。そして、実際に協力が得られ、調査用紙が回収できた94名のうち、全ての項目について回答した74名(機械・精密システム工学科8名、航空宇宙工学科10名、情報電子工学科27名、バイオサイエンス学科29名)を分析対象とした。

3.2 研究実施上の配慮

研究実施上の倫理的配慮として、このキャリアデザインI履修者(2年生)に対して、本研究と調査の趣旨を口頭及び書面にて説明して合意を得た。

3.3 調査実施方法

すべて質問紙法による調査である。キャリアデザインIの講義の中で、質問紙を一斉配布しその場で回収した。調査時期は2021年6月に実施した。

3.4 質問紙の構成

基本的属性(性別、進路決定の有無やその内容)に加えて次の尺度を用いた。

3.4.1 進路課題自信尺度

学生の自己効力感を測定する項目として、坂柳・清水(1990)が開発した、「進路課題自信尺度」12項目(表1)を用いた。この尺度は、若者の進路選択に対する自己効力感を「教育(進学)」、「職業」、「人生」の3領域について各4項目、合計12項目の少ない項目数で測定できることが特徴であり、各尺度は進路選択を行う際の課題に対する自信の程度を表すものである。

各領域とも4つの下位の課題項目（①情報収集、②目標と計画、③決定、④適応）から構成され、「自信がある」（5点）、「どちらかといえば自信がある」（4点）、「どちらともいえない」（3点）、「どちらかといえば自信がない」（2点）、「自信がない」（1点）までの5件法で回答させた。ただし、本研究の分析に使用する項目は、進学希望の学生がごく少数のため、職業的進路課題と人生的進路課題の2項目の課題を使用する。

表1 進路課題自信尺度の内容（坂柳・清水, 1990）

課題	項目内容
教育的進路課題	1 進学先を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること
	2 進学のための目標や計画をはっきりと立てること
	3 自分に合う進学先を決めること
	4 進学した後、充実した学校生活を送ること
職業的進路課題	1 希望する職業を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること
	2 希望する職業を実現するための目標や計画をはっきりと立てること
	3 自分に合う職業を決めること
	4 就職した後、充実した職業生活を送ること
人生的進路課題	1 人生や生き方を知るために必要な情報・資料を自分で集めること
	2 人生での目標や計画をはっきりと立てること
	3 自分の人生や生き方を決めること
	4 充実した幸福な人生を送ること

3.4.2 将来の進路に関する質問項目

希望する進路について「希望する進路が決まっている」（1点）、「だいたい決まっている」（2点）、「まだあまり決まっていない」（3点）、「全く決まっていない」（4点）までの4段階で評価させた。この項目は点数が低いほど決定度が高いことを示す。

3.4.3 将来の仕事に関する質問項目

将来の仕事について「よく考えている」（1点）、「だいたい考えている」（2点）、「あまり考えていない」（3点）、「全く考えていない」（4点）までの4段階で評価させた。この項目は点数が低いほどよく考えていることを示す。

3.4.4 職業レディネスに関する質問項目

学生の職業に対する興味・関心やそれに対する自信度などは、「職業レディネス」とされ、それを測定するために、学校教育の中で幅広く活用されている検査が、「VRT 職業レディネス・テスト第3版」(Vocational Readiness Test：以下「VRT」と記載、独立行政法人労働政策研究・研修機構編)である。

この検査は、ホランドの職業興味理論をもとに作成され、この理論では、パーソナリティと職業(環境)が6つのタイプに分類される。その両者のマッチングを行い、性格と同じタイプの職業(環境)を選択した方が、職業上の満足感が高く成功の可能性も大きいとされる(労働政策研究・研修機構, 2012)。

この検査では、対象者を、中学から大学生、さらに、職業訓練校、職業相談機関等の相談者とし、職業興味と職業遂行の自信からパーソナリティを探ることができる。そして自己理解のために基礎的志向性と職業志向性を測ることにより、職業に対するレディネス(準備度)を把握し、職業に関する自分のイメージをチェックし、進路選択への動機づけを促すことができる。

この検査の構成は、職業興味を測定するA検査と基礎的志向性を測定するB検査、職務遂行の自信度を測定するC検査から構成されている。A検査は、職業・仕事の内容を記述した54項目の質問からなっており、各質問に対して、「やりたい」、「どちらともいえない」、「やりたくない」の3段階で回答する。このA検査では、6つの職業領域(現実的職業領域(R)、研究的職業領域(I)、芸術的職業領域(A)、社会的職業領域(S)、企業的職業領域(E)、慣習的職業領域(C))の各領域(分野)に対して、興味の強さの傾向を測定する。B検査は、日常の生活行動について記述した64項目からなっており、各質問に対して、「あてはまる」、「あてはまらない」で回答する。その回答から、職業への興味・関心の基礎となる3つの基礎的志向性がどのような傾向があるのかを測定する。この3つの志向性とは、対情報関係志向(D尺度)、対人関係志向(P尺度)、対物関係志向(T尺度)である。C検査は、A検査と同一の54項目の質問で構成されており、各質問に対して、「自信がある」、「どちらともいえない」、「自信がない」の3段階で回答し、A検査と同じ6つの職業領域において、職務遂行に対する自信度についてどのような傾向を示しているのかを測定する。

このように VRT では、職業に関する興味や自信など、いろいろな観点から職業に対する準備の程度を測定する。また、VRT における職業への興味は仕事に対する積極的な関心を示し、また、職務遂行への自信は、能力的な側面での自信を反映すると考えることができる。

4. 結果

4.1 進路課題自信度に関する回答について

進路課題に対する自己効力感の程度と進路の決定度や将来の仕事の考慮度の関連性について検討する。職業的進路課題と人生的進路課題の 4 つの課題項目（①情報収集、②目標と計画、③決定、④適応）に対する自信度の各項目の得点と合計点の平均値は表 2、表 3 のとおりである。最低点は 1.0、最高点は 4.0 である。これら項目の平均点は、点数が高いほど自信が高いことを意味する。

表 2 職業的進路課題に対する自信度の平均値（点数）

領域	職業的進路課題				
項目	情報収集	目標と計画	決定	適応	合計
平均値	3.29	3.05	3.34	3.12	12.79

表 3 人生的進路課題に対する自信度の平均値（点数）

領域	人生的進路課題				
項目	情報収集	目標と計画	決定	適応	合計
平均値	3.27	3.01	3.17	3.40	12.84

表 2 の職業的進路課題の項目の得点と合計点の平均点については、統計的に有意差はなかった。表 3 の人生的進路課題に対する自信度の平均値についても統計的に有意差はなかった。しかしながら、この 2 領域の「目標と計画」については、他の項目に比較して最も低かった。これは、特に目標や計画を立てることへの自信が低いことを意味している。

これらの得点と下村ら（2008）が高校生に行った調査の得点を比較すると、高校生の職業的進路課題の得点の合計点の平均値が 11.27、人生的進路課題については 11.52 であり、今回の大学生の調査の得点の方がいずれの得点も高い。

4.2 進路の決定度と将来の仕事に対する考慮度についての回答について

次に、質問 3 の将来の進路をどの程度決定しているかについての回答の結果を表 4 に示す。この平均値は 2.51 である。この表 4 から「決まっている」と「ほぼ決まっている」と回答した学生が 50% である。

また、質問 4 の将来の仕事についてのどの程度考えているかの結果を表 5 に示す。この平均値は 2.28 である。なお、この数値は、数値が低いほど質問 3 では決定度が高く、質問 4 では、考慮している程度が高いことを示している。「よく考えている」と「だいたい考えている」と回答した学生が約 60% である。

表 4 進路についての決定度（人数（％））

決定度	決まっている (1 点)	だいたい決定 している (2 点)	あまり決まって いない (3 点)	全く決まって いない (4 点)
人数	8 (11.0)	29 (39.2)	30 (41.0)	7 (9.5)

表 5 将来の仕事に対する考慮度（人数（％））

考慮度	よく考えている (1 点)	だいたい考えて いる (2 点)	あまり考えて いない (3 点)	全く考えていない (4 点)
人数	13 (17.6)	33 (44.6)	27 (36.5)	1 (1.4)

さらに、この進路の決定度と将来の仕事に関する考慮度の関連をみるために、相関係数を算出した。それは 0.64 ($P<.01$) で統計的に有意であることから、両者は関連があることが分かった。

4.3 進路課題自信度と職業の決定度、及び将来の仕事の考慮度との関連

次に、進路課題の自信度と、進路の決定度と将来の仕事についての考慮度との関連を考えるために各項目間の相関係数を算出した。その結果を表 6 に示す。なお、本研究では、この決定度と考慮度の数値が低いと決定度と考慮度が高くなるため、相関係数は逆相関の数値となっている。その結果、この相関係数は、職業的課題については、両方が統計的に有意であったが、人生的課題については、考慮度のみが統計的に有意であり、差があることが分かった。

表 6 決定度、及び考慮度と進路課題に対する自信度の相関係数

	決定度	考慮度
職業的課題	-0.29*	-0.30**
人生的課題	-0.15	-0.32**

**…P<.01 *…P<.05 無印…有意水準に達していない

次に、進路の決定度、将来の仕事の考慮度によって、どの程進路課題に対する自信度の得点が異なるかについて検討した。まず、将来の職業の決定度について、「希望する進路が決まっている」と「だいたい決まっている」に回答した学生を「進路決定群」とし、「まだあまり決まっていない」「全く決まっていない」学生を「進路未決定群」とした。また、職業的進路課題と人生的進路課題の各 4 項目の合計点を自信度の得点とした。この 2 群の各課題に対する自信度の得点の平均値を表 7 に示す。この結果は、職業的課題についてのみ統計的に有意であった。このことから、職業選択の決定度と職業選択決定を行う際の課題遂行についての自信度が関連していることが分かる。

表 7 決定度別の進路課題の各課題の自信度の平均値

	進路決定群	進路未決定群
職業的課題**	13.76	11.89
人生的課題	13.51	12.24

**…P<.01 無印…有意水準に達していない

さらに、将来の仕事について、「よく考えている」と「だいたい考えている」に回答した学生を「考えている群」とし、「あまり考えていない」、「全く考えていない」学生を「考えていない群」とした。その 2 群の進路課題の各課題に対する自信度の得点を表 8 に示す。各課題における考慮する程度を示す。この結果について、統計的に有意であったのは、職業的課題と人生的課題の両方であった。これらのことから、将来の仕事の高領土と職業選択決定を行う際の課題遂行に対する自信度、及び自分の仕事を考える際の課題遂行に対する自信度が関連していることが分かった。

表 8 考慮度別の程度の進路課題の各課題の自信度の平均値

	考えている群	考えていない群
職業的課題**	13.61	11.59
人生的課題**	13.57	11.81

**...P<.01

4.4 職業レディネステスト（VRT）の結果について

4.4.1 学部系統別の傾向について

次に、職業レディネスに関して学部系統によって職業レディネスの傾向が異なるかについて検討する。本研究の対象者は理工系学部の学生であるが、機械・精密システム工学科、航空宇宙工学科、情報電子工学科の工学系学生と、バイオサイエンス学科の理学系学生の進学・就職先が異なっていることから（キャリアサポートセンター, 2021）、職業興味や基礎的志向性の違いがあると予想される。そのため、工学系と理学系の学生に分けて分析を行った。

この2群の学科系統別に職業興味を測定するA検査、基礎的志向を測定するB検査、職務遂行の自信度を測定するC検査の結果に関して、学部系統別の標準得点の平均値は表9、表10、表11のとおりである。この得点は、パーセンタイルとして標準化された得点であり、最低が0点、最高点は100点である。この得点は高いほどその職業領域に興味傾向が強く、自信度が高いことを示す。また、B検査に関しては、この得点が高いほど各領域への基礎的志向性が高い。

また、表9の学部系統別のA検査の職業興味の得点の比較では、工学系と理学系で最も差があるのがR（現実的）の得点である。工学系の学生の方が理学系の学生よりもこの領域に対して興味が高く、統計的に有意であった。

表 9 A 検査 職業興味の得点の平均値

	A-R**	A-I	A-A	A-S	A-E	A-C
工学系	61.56	71.82	59.18	58.29	57.36	69.33
理学系	46.24	81.14	61.59	51.62	55.10	62.59
全体	55.55	75.47	60.12	55.68	56.47	66.69

**...P<.01 無印...有意水準に達していない

また、I（研究的）の得点については、理学系の学生の得点の方が工学系の学生よりも高いが、統計的に有意ではなかった。ただし、工学系の学生においても、他の分野の得点に比較し I（研究的）の得点が最も高いことから、工学系の学生も研究的な領域の仕事に興味が高いことが分かる。

次の B 検査の基礎的志向性については、対情報関係志向（D 尺度）では、工学系の学生の方が理学系の学生よりも得点が高く、対人関係志向（P 尺度）においては理学系の学生の方がその得点が高かったが、両者に統計的な有意差はなかった。対物関係志向（T 尺度）についても統計的に有意差はなかった。

表 10 B 検査 基礎的志向性

	B-D	B-P	B-T
工学系	74.87	46.96	66.69
理学系	70.24	57.38	64.62
全体	73.05	51.04	65.88

次に、C 検査の職業領域ごとの職務遂行の自信度の得点に関して、工学系と理学系の得点は、前述の A 検査とほぼ同様の得点の傾向である。

表 11 C 検査 自信度の得点の平均値

	C-R**	C-I**	C-A	C-S	C-E	C-C
工学系	57.53	61.84	50.73	59.69	48.64	72.71
理学系	42.97	78.24	53.14	57.86	53.28	65.17
全体	51.82	68.27	51.68	58.97	50.46	69.76

**... $P < .01$ 無印...有意水準に達していない

R（現実的）の得点については、工学系の学生の方が理学系の学生よりも自信度が高く、I（研究的）の得点については、理学系の学生の得点の方が高く、いずれも統計的に有意であった。

4.4.2 職業興味と職務の遂行に対する自信度の関連について

職業分野に対する興味とその領域で行う職務の遂行への自信度との関連を検討する。まず、A 検査と C 検査の項目間の相関係数の結果を表 12 に示す。

表 12 A 検査、C 検査の項目間の相関係数

	A-R	A-I	A-A	A-S	A-E	A-C
C-R	0.81**	0.39**	0.11	0.10	0.13	0.07
C-I	0.41**	0.83**	0.20	0.09	0.26**	0.30**
C-A	0.22*	0.36**	0.73**	0.31**	0.39**	0.14
C-S	0.22*	0.08	0.52**	0.69**	0.45**	0.06
C-E	0.12	0.31**	0.50**	0.31**	0.83**	0.16
C-C	0.03	0.21	0.11	0.08	0.16	0.79**

**...P<.01 *...P<.05 無印...有意水準に達していない

A 検査と C 検査の得点の相関係数について統計的に有意となった項目のうち、着色してあるセルは、特に強い相関がある項目である。このことから、興味強い職業領域とその職業領域に関する職務の遂行に対する自信度は深く関連していることが分かった。なお、その他に、工学系と理学系の学科系統別の分析も行ったが、学部系統間で統計的に有意ではなかった。

次に、B 検査と A 検査、及び C 検査との相関係数を表 13、表 14 に示す。なお、B 検査の項目間の相関は、B-D と B-P が 0.08、B-D と B-T が 0.18、B-P と B-T が 0.26 であり、この項目のみ統計的に有意であった。

B 検査と A 検査、及び C 検査との関連では、A 検査と C 検査との関連では同様の傾向がみられた。D（対情報関係志向）とは、I（研究的）、E（企業的）、及び C（慣習的）が関連し、P（対人関係志向）とは、I（研究的）A（芸術的）S（社会的）、E（企業的）が関連している。さらに、T（対物関係志向）とは、R（現実的）と I（研究的）A（芸術的）が関連していた。

表 13 A 検査と B 検査の項目間との相関係数

	A-R	A-I	A-A	A-S	A-E	A-C
B-D	0.19	0.24*	0.10	0.10	0.37**	0.34**
B-P	0.03	0.25*	0.44**	0.37**	0.51**	-0.09
B-T	0.49**	0.41**	0.25*	0.12	0.09	0.04

**...P<.01 *...P<.05 無印...有意水準に達していない

表 14 C 検査と B 検査の項目間との相関係数

	C-R	C-I	C-A	C-S	C-E	C-C
B-D	0.21	0.25*	0.15	0.14	0.43**	0.36**
B-P	0.03	0.28*	0.43**	0.43**	0.56**	-0.05
B-T	0.59**	0.41**	0.40**	0.17	0.17	0.14

**... $P<.01$ *... $P<.05$ 無印...有意水準に達していない

5 考察

今回の研究では、理工系大学生の自己効力感に着目し、大学生の職業選択に対する意識と、将来に向けた進路選択や就職活動等における職業興味や職業に対する自信度などの職業レディネスの実態について明らかにした。

その結果、進路の決定度、及び将来の仕事についての考慮度と、そのために遂行する課題に対する自信を表す進路課題自信度が関連していることが分かった。すなわち、このことは、進路決定の度合いが高いこと、また将来への仕事を考えているほど、職業的進路課題、人生的進路課題のいずれの課題に対する自信が高いことを示している。これは、進路課題に関して自己効力感が高い学生は進路の決定度や将来の仕事の考慮度が高くなるという事前の予想を支持する結果である。このことから、自分の将来について、将来の職業を含めて自分が望む姿を早期から明確にすることへの支援の取組が求められる。

さらに、進路課題に対する自信度に関して、職業的進路課題と人生的進路課題の両方の下位項目のうちの「目標と計画」の項目の得点が最も低かったことから、職業選択過程において、将来の目標を明確にし、自信を持って計画的に進んでいけるように、授業内容や支援のプログラムを検討する必要がある。そのために、学生一人一人が職業選択をする過程で、自分の職業興味とそのための志向性などの職業適性に気づき、自分の将来の進路についての夢や希望を明らかにできるようにするために自己理解を深める学習内容を検討することが必要である。

このことに関連して、これまでに筆者は、大学生ではなく発達障害児者を対象としてはいるが、彼らが自分の将来に関する自己イメージを意識することが難しい状況であり、インターンシップの事前事後の学習においてライフプラン

ニングを行うなどの自己理解を深めることの重要性を提案した（清水, 2020）。この取り組みについては、今後さらに検討していきたい。

次に、職業興味や基礎的志向性などの職業レディネスについては、工学系と理学系との学生の傾向が違ことが明らかになった。併せて、どの職業分野に興味を持つかということと、その分野で行う職務の遂行に対する自信が強く関連しているということが確認され、事前に予想したことと同様の結果が得られた。ただし、本研究においては、ここで扱った項目に関連があることが示されたが、両者の因果関係は明らかになっていない。

これらのことから、学生一人一人が自分自身の職業に対する興味・関心を深く理解し、自分が興味のある職業分野の職務遂行に対する自己効力感を高めることができるように適切な支援をさらに考えていく必要がある。また、理工学部専門領域に関する各授業においては、理工系学部の特色を再確認し、授業内容や研究等がどのような職業と関連しているかを学生に明示しながら、授業を進めることが重要であると考えられる。

これらの取り組みについて、例えば、早期から学生が「キャリアパスポート」を作成し、学修成果を可視化することや、それを活用して大学生活の活動実績や自らの志向を端的に説明するための支援が挙げられる。さらに、筆者は、高機能自閉症生徒への自己理解支援において、軽度から重度の知的障害のある ASD（Autism Spectrum Disorder）児者のために作られた、成人期の自立を促すためのアセスメントとして有効性が報告されている TTAP（TEACCH Transition Assessment Profile：自閉症スペクトラムの移行アセスメントプロフィール）を活用した研究を行っている。この研究においては、この TTAP を用いた支援が、職業適性や自分に必要な支援への理解を促進することを明らかにした（清水, 2018）。この研究で明らかになった TTAP の有効性については、今後、大学生にも適用できるのではないかと考えている。

大学生が自分の個性や適性に目を向け自己理解を深め、職業選択のための行動への自己効力感を高めることは、将来の進路を考え、職業を選択する時に大きな手掛かりとなることから、この TTAP 以外にもその他の職業適性に関する実態を適切に把握できるアセスメントの活用を検討していくことが今後の課題である。

引用文献

- ベネッセ（2014）大学卒業後の進路に対する活動 大学生の学習・生活実態調査.
<https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku>.（閲覧日 2021.9.30.）
- 五十嵐敦（2018）大学生のキャリア発達と進路不安についての研究～大学 3 年生の進路意識と学生生活の観点からの検討～. 福島大学総合教育研究センター紀要第 24 号.
- キャリアサポートセンター 2021 帝京大学理工学部・進路・就職先一覧
https://www.teikyo-u.ac.jp/faculties/science_tech/course（閲覧日 2021.9.30.）
- 労働政策研究・研修機構（2006）『職業レディネス・テスト（第 3 版）手引き』.雇用問題研究会.
- 坂柳恒夫・清水和秋（1990）中学生の進路課題自信尺度と性役割自己概念との関連.進路指導研究. No11. pp18–27.
- 清水浩（2018）高機能自閉症生徒の自己理解支援に関する研究.山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告. 45 号. pp53 – 60.
- 清水浩（2020）発達障害児者のライフプランニングに関する研究. 風間書房.
- 下村英雄・室山晴美・西村公子・菰田孝行（2008）学校段階の若者のキャリア形成支援とキャリア発達.『労働政策研究報告書 No.104』. 労働政策研究・研修機構.
- 富永美佐子（2006）高校生のための進路選択自己効力尺度の作成—内容的妥当性・並存的妥当性の検討から—,東北大学大学院教育学研究科研究年報. 54. pp355–376.
- 浦上昌則（1993）進路選択行動についての心理学的考察—自己効力理論を用いて—. 進路指導研究. 14. pp52 – 56.
- 浦上昌則（1995）学生の進路選択に対する自己効力に関する研究. 名古屋大学学校教育学部紀要教育心理学科. 42. pp115–126.
- 横山明子・石川朝子・糸川美佐子・森本紀子（2015）大学生のキャリア発達とキャリアガイダンス.帝京大学理工学部研究年報人文編 第 21 号. pp175–199.